

小津久足「松陰日記」について・付翻刻

菱岡, 憲司
有明工業高等専門学校

<https://doi.org/10.15017/25275>

出版情報 : 文献探究. 49, pp.7-25, 2011-03-31. 文献探究の会
バージョン :
権利関係 :



小津久足「松陰日記」について・付翻刻

菱岡 憲司

「松陰日記」について

小津久足(1)「松陰日記」は、嘉永三年(一八五〇)五月二十四日に松坂を出立し、同二十六日に京着。それより六月八日まで滞在し、十一日に自宅に帰りつくまでの紀行である。

嘉永三年時、久足は四十七歳。安政三年(一八五六)に五十三歳で亡くなるため、晩年の作品といえる。このとき、すでに四十にあまる紀行を残し、そのうち約半数は、目的地にせよ経由地にせよ、京に滞在する。これは商用を兼ねて京に赴くためであるが(もつとも商売上のことは紀行に書き記さない)、ことさらに都を愛するためでもあり、とくに桜の時期をうかがって春に訪れることが多い(2)。しかし本書では、五月二十六日から六月八日までの夏の盛りに滞在する。これは久足としては例のないことで、過去、京の青葉を鑑賞するべく夏場に滞在したこともあるが(「青葉日記」天保十三年)、それでも五月二十二日には暑さを避けて帰路についている。

冒頭「ことし又、例の都にもすべきことありて」と記すばかりで、目的を明確には示さないものの、祇園会を見物することも目的のひとつ

つであったと考えられる。もつとも今回は紀州家の御停止により日程が七日ずつ延期されており、御輿洗と稚児社参のみ見物し、山鉾巡行等は見ずじまいである。

本書は、同じく京に滞在した従来の久足紀行文と比較して、いささか趣の異なるものとなっている。他の作品では、「名所古跡は、としかくにおなじところをみまほしきものぞかし」(「斑鳩日記」天保七年)「いつきてもあかぬは都也」(「青葉日記」天保十三年)と、何度見た場所でも厭うことなく、くりかえし洛中を遊覧するのが常である。本書でも北野天満宮などはめぐるものの、往年にくらべて観覧する場所は圧倒的に少なく、またその記述も「けふは安井金比羅・清水観音などにまうづ」とある程度で詳細は知れない。

これは暑中の遊覧を避けたこともあろうが、内宮・外宮の遷宮を記す「八声の鶏」(嘉永二年)、一社奉幣の模様を記録した「花のぬさ」(安政二年)、新内裏への遷幸を見物した「敷島日記」(安政二年)など、晩年に近づくにつれて祭礼行事等、有職故実への関心が高まっております。また「はやくはとしごと」のやうにものせしかど、こたびは六年目なり」(「敷島日記」)とあるように、「松陰日記」頃から、京の名勝

遊覧への意欲がようやく衰えたことがうかがえる。

対して本書で印象に残るのは、出会った人々との会話の記録である。公家の豊岡治資・同随資、また鈴木星海・岸岱・土佐光文など名の通った人はもとより、旅宿の按摩や植木屋、駕籠かきなど、名もなき人との会話も多く載録する。こうした記述は、他の久足紀行文にも見受けられるものの、本書では際立って多く、幾度も訪れ新鮮さを失った名所よりも、はじめて見る行事の模様、そしてはじめて聞く珍しい話を積極的に記しとどめようとする姿勢が感じられる。有職故実への関心の高まりも含めて、久足晩年の興味のありどころがうかがえる。

「松陰日記」の書誌

「松陰日記」は、三重県立図書館、日本大学総合学術情報センター、天理大学附属天理図書館に所蔵される。翻刻の底本とした三重県立図書館所蔵本、及び日本大学総合学術情報センター所蔵本の書誌を記す。

三重県立図書館・武藤文庫⁽³⁾ (L980/オ/2)。一冊。二四・四×一六・八糎。袋綴。表紙は横刷毛目模様、浮線綾散らしの型押し。外題「松陰日記 全」と左肩に単枠題簽。内題「松陰日記」。十行書。二十六丁。印記「武藤蔵書之印」(朱陽)。奥書「嘉永三年の六月/小津久足」。

日本大学総合学術情報センター (081.8/0.99/55)。一冊。二五・〇×一八・〇糎。袋綴・仮綴。共表紙。外題「松陰日記 記行五十五全」と表紙左に打付書。内題「松陰日記」。十行書。二十六丁。印記

「日本大学図書館蔵」。胡粉による訂正あり。奥書「嘉永三年の六月/小津久足」。

旅程

嘉永三年五月二十四日、京を目指して松坂の自宅を出立する。津・久保田を経て、「中の山」または「みわたし」と呼ばれる松原をのぞんで一首詠む。

みわたしは緑の外に色もなく松陰とほきみちのひとすぢ

「松陰」の語は他に見受けられないため、「松陰日記」という書名はこの歌による。例のない夏場に旅をし、松の木陰を慕わしく思う心情が託される。

椋本・楠原・関を過ぎ、筆捨山の麓で憩い、坂下にて定宿の和泉屋に泊まる。道中、この宿の下男に会い、宿泊を告げていたため、準備がよい。

二十五日。鈴鹿峠を越え、土山・大野・水口を過ぎ、水仕掛けの人形と心太で有名な夏見村に差しかかる。石部を過ぎ、野洲川沿いの眺望が開ける。近年の洪水で堤が決壊したため、塩田かと見まごう景色である。草津にいたり柏屋に宿る。

二十六日。矢橋・大津を過ぎ、逢坂を越え、日岡にいたる。道すがら名号・題目を彫りつけた石標を目にする。

はた名号・題目などの石標たちたるは、いづかたにもあなるが、これらもことわりいかゞなることにて、撰取不捨の本願にはかなへることなるべけれど、罪人までもすくふやうのことに成りては、罪人はなかくよにおほくなりて、あしきことする人たへざることわり也。かくいはゞ、せばきにしたれど、公の罪人となる人どもは来世も永くあしきにおつ、といふやうのへだてにぞあらまほしけれ。自他平等といひて、よきこともあなれど、人倫のみちをみだることも、はたおほく、これらの弊は浄土宗よりは生まれり。「念仏は亡国の声たるがゆゑに承久の乱出来て王法衰たり」といふも、そのいはれなきにあらず。

久足の家は曹洞宗であり、天保十五年（一八四四）には総本山の越前永平寺を訪ね、大施餓鬼を執り行っている（『志比日記』）。また「陸奥日記」（天保十一年）にも「達磨宗の歌人雑学菴のあるじ／久足ふたゞびしるす」との奥書を記す。古学を批判するようになる（古学離れ）⁽⁴⁾以降、紀行中に黄檗寺の唐風を賞賛することも多く、禪に親炙する久足の倫理観がうかがえる。「もとより禅宗には、売主坊主すくなく、俗人に法をすゝむることなけれど、浄土宗は売主坊主世上におほく、みだりに法をうり、やゝもすれば、つてをもとめて、御先祖念仏信心の徳により、家門繁昌はすなり、浄土宗の本尊安置せるも因縁ふかしなど、さまざまの妖言いふがあれば、ゆめくまよはざるべからず」と、家の書「家の昔かたり」（弘化三年）⁽⁵⁾にも書き残すため、この姿勢は生涯にわたってつづく。

栗田口、禁裏御領の松山は日中でも鬱蒼とした山だったが、「法師

のかしら」のごとき禿山になっている。

昼ごろ京に着き、いつもの三条大橋詰の目貫屋に泊まる。

二十七日。天気のみ記す。商用で諸所に赴いたか。

二十八日。土御門家に仕える鈴木某を訪ねる。土御門家は安部晴明を家祖とする安部氏嫡流であり、陰陽道をよくする。土御門家に仕えた鈴木氏として、鈴木星海・百年親子が該当する。

鈴木星海は易学者。天明二年（一七八二）生、文久二年（一八六二）没、八十一歳。名は世孝、字は子養、通称は俊平・図書。

鈴木百年は画家。文政八年（一八二五）生、明治二十四年（一八九一）没、六十七歳。名は世壽、字は子孝、通称は図書。

両者ともに『平安人物誌』に名をたらね、嘉永五年（一八五二）版では、星海は「儒家」「算数玄機」「易学」、百年は「画」に分類される。嘉永三年当時、星海は六十九歳、百年は二十六歳であり、陰陽に關する久足の質問に易々と答えていることから、ここでは鈴木星海と考えられる。

続いて画家の岸岱を訪ねる。岸岱は岸派の祖岸駒の長男。天明二年（一七八二）生、元治二年（一八六五）没、八十四歳。名は岱、字は君鎮、通称は筑前介。当時六十九歳。

久足は、「この人、画はさのみ妙手にもあらねど、古老といひ、ものずきある人にて、学力も今のよの画工のにはすぎたるほどなれば、ものがたりをかく、世上のこともわがこゝろひとつにさだめがほなる人也」と評する。岸岱所持の古屋谷石（古谷石）を見る。

二十九日。豊岡大藏卿を訪ねる。豊岡家は日野家の庶流。寛文六年（一六六六）、日野弘資の三男有尚が一家を立てる（6）。

本書の豊岡大藏卿とは、豊岡治資のこと。寛政元年（一七八九）生、嘉永七年（一八五四）没、六十六歳。正三位にいたる。大藏卿には、文政四年（一八二二）に任じられる。

久足の応接には、その息随資も同席する。随資は、文化十一年（一八一四）生、明治十九年（一八八六）没、七十三歳。正三位にいたる。

当時、治資六十二歳、随資三十七歳。久足は、京に赴く度に豊岡家を訪ねるのが通例である。

その場に「御弟君」の町尻量輔が来訪する。町尻量輔は、享和二年（一八〇二）生、明治七年（一八七四）没、七十三歳。従二位にいたる。嘉永三年時、四十九歳。

その後、土佐光文を訪ねる。土佐光文は画家。文化九年（一八一二）生、明治十二年（一八七九）没、六十八歳。名は光文、字は子炳、通称は左近将監。当時三十九歳。

久足は、「としのほど三十あまりなるに、古き図どものことにつきては、とふことをことごとくこたへ、さだかにておぼろげならず。さればとて此人、学力はあらねど、画にて一目見るは、書をよみあきらめたるには、はるかにまさりて、こも千聞一見のたぐひといふべく、筆にしるし口にいふことのわかりがたさも、画にてはわかり安きものなれば、おのづからたどくしからぬにもあるべけれど、家の徳にもよるべし」と評する。

六月一日。祇園社に参詣する。例年ならば昨夜は御興洗、今日は稚児社参のはずだが、尾州家の御停止により延期される。

繩手通りの骨董店に行き、昨日、岸岱の家で見た古谷石を見つけ、買い求める。

二日。北野天満宮に参詣する。往路、孝明天皇生母の准后宣下ならびに新待賢門院号宣下にもなう御殿修復を見る。内裏は道に草が生えるなど整備の行き届かないことが目につくが、「これらはふかくゆるあることなるべし」と、皇威の衰えを否定する。

参詣後、七本松あたりの植木屋に寄る。

三日。安井金比羅宮・清水寺等に参詣する。

四日。堀川東、丸太町の植木屋に赴き、石菖を購入する。「この石菖に歌人のめでしためしをきかねど、から人は文房の具にそへてもあそぶめり。書斎におくには、げにもみやびたるものなり。すべて書斎の風流は、から人こそよく趣を得たれ」との文言に、久足の趣味がうかがえる。この植木屋にて、古谷石の産地、紀州古屋谷のことを聞き知る。

五日。暑中、外出する。途次、熊谷山法然寺の鎮守の天満宮に「火除天満宮」との提灯がかかるが、「こは住僧のわるだくみにて、この御社のふしぎにのこれるより、かゝるちようちんをかけたるにて、その証は、ちようちんあたらしきにてもしるく、そのたくみしれる人は、住僧をにくむ」との同行人の言葉を聞く。

さては、よの常の人は奇をこのむがおほければ、おもひはかりなくあざむかるゝがおほかるべし。霊験などいふには、かゝるたくひおほかり。心す

べし。僧は人のまよひをさますべきものなるに、まよひをさましては世わたりたつきをうしなへば、なかく人にまよはす妖僧おほきが今世のならひ也。さきにもいふごとく、この弊おほく浄土宗よりはじまりて、その後ひらけたる宗にことに多し。にくむべきことならずや。

利殖に走る僧侶に対する久足の不信感強い。僧侶は人々の迷いを晴らすどころか煩惱を増させ、かえつて人を迷わせる、しかし「まよはさるゝはおもしろく、さまさるゝはおもしろからぬ人情」なので世に栄えているとの発言（「難波日記」弘化四年）もある。

六日。豊岡家を再訪し、先日買求めた古谷石への命名を乞い、「九天」との銘を得る。

七日。三条大橋より、御輿洗を見物する。御輿洗が今日になった理由が「日かずちままりては、ぬさ代のたがひこよなき」からだとなり、嘆息する。見物の後、祇園社に参詣して宿に帰る。

八日。稚児社参を見物する。華やかな行列の様子を見守った後、祇園社に詣でる。後の日程は十四日・二十一日に順延されたことを知るが、「かねては祇園会みまほしくおもひしかど、おのれ暑気を甚おそるれば、そのころまでとはまるべくもおもはず、こたびむねとしてまうのぼれることは、はやくとのひしかば、明日はいでたつべくおもひさだめて」と、京を離れることを思い立つ。暑さを避けて今夜のうちに駕籠に乗り、京を出る。石場にさしかかり、夜が明ける。

九日。石場より矢橋まで渡船する。曇り空を頼りに草津・目川・多川・石部・夏見を過ぎ、水口の升屋に宿をとる。供の男を宿に残して駕籠に乗り、石の軽重で吉凶を占うことで知れる山村天神を参詣する。水口の宿に帰り、按摩に落雷の話聞き、殿村安守（篠斎）の話思い出す。

昨夜と同じく、夜のうちに宿を立つ。土山を過ぎ鈴鹿山あたりで夜が明ける。

十日。猪鼻にて落雷の現場を確認する。坂下・関・楠原・椋本・久保田を過ぎ、津で知人のもとに宿る。

十一日。遅く津を出立し、午後、松坂の自宅に帰り着く。

豊岡卿との語り

本書に登場する人物のなかで、まず挙げるべきは豊岡治資であろう。久足が「中丸太町の寺町西へ入ところ」にある豊岡家をはじめ訪ねたのは、天保九年十月十五日（「ぬさぶくろ日記」）。以前からいささかの面識はあったようであるが、初訪問のこのとき以降、京に出るごとに豊岡家を訪ねるようになる。その度に、多くは豊岡随資も交えて、菓子や夕餉の饗応を受けながら会話を重ねる。「風流のみちばかりをかきものはなし。風流のみちならずは、いかで雲の上人にへだてなくものがたりを聞えたてまつらむ。いとありがたきことになむ」（「ぬさぶくろ日記」とあるため、おそらくは歌を通じて知り合ったと考えられる。

面談の折は、宮中での有職故実について久足が質問し、それに豊岡

卿が答えるのが常である。「まゐれる度々に今世の有識のこのわかりがたきことなどうかゞひ奉るに、いと安らかにこたへ給ひ、そのすぢよくわかりて、うたがひのとみにうちとくることおほし。俗に有職家とよぶる学者もあれど、こはよにいふ』をか水練』のたぐひにて、たゞ書籍のうへをさぐりてきはめたるにて、真物をしらざれば、たがひがちなり。有職のことは、この君などにとひ奉るがあきらかなり」（『青葉日記』天保十三年）と、地下の立場からはうかがい知れない宮中のことを、豊岡卿は体験に即して伝える。

本書でも二度の訪問の際、御撫物のこと、御停止の通例、大徳寺・妙心寺の僧のこと、陽明家（近衛家）虫払いの様子などを拝聴する。

去年の夏、陽明家御虫払拝見あそばされし御ものがたりありて、その品々の目録、ふところがみにしるされたるをみせたまへり。かきうつさまほしきよしをねがひてかり奉る。その品々の中には、世にめづらしきものおほく、「小松殿御消息」などみえたるは、ことにめづらし。こは、平家の人々の筆跡おほき安藝国嚴嶋にすらなきよし、かねてきけるに、いみじきこと也。豫楽院殿は、かゝるすぢに御ものすき、よにたぐひなかりし公なれば、御函書付の品おほきよし。『槐記』にいでたる品々も、その中におほくみえたり。「そのほか茶器なども、よにいみじき御伝来の品おほかれど、そはいまだみず」とのたまへり。

富豪とはいえ、身分としては一介の商人にすぎない久足にこれほど親しく接するのは、その才能を愛する気持ちが豊岡卿にあつたと思われる。天保十五年に面談した折は、「今月の御兼題いとよみにくし。こゝろみによみてみよ」と「八重桜」「簾外恋」「庭上竹」の題を示し、

久足はその場で各二首を詠む。また豊岡卿は、久足の「煙霞日記」（天保八年）を披閲しており、堀河康親にも同書を回覧する。

はやく、わが「煙霞日記」を見せ奉りしに、「あまりに耳めづらしきこと多ければ、とめおかまほし」との給へりしが、それを堀川三位康親卿に見せ給へるに、「評をなし給へり」とて、おなじ卿のみづからかき給へるを、そのまゝに給へり。（『志比日記』天保十五年）

続けて「こはかたじけなさ身にあまれることなれば、こゝにかいつけつ」と、堀河康親による「煙霞日記」評を記す。馬琴も久足の紀行文を激賞してより親密なつきあいはじめた（『こと』を思うと、久足の文才を高く評価する人が同時代に確かに存在したことが確認できる）。

久足は、地理のことは現地に赴いて確認することを信条とする。それが「さしもの翁の考も、わが今実景をみるにはおよばず、たゞ机上の学にてものを論ずる人には、かゝるあやまりおほし」（『浜木綿日記』天保十年）と宣長批判のよりどころにもなる。そして旅先で道を問うことの重要性を説いて「こは旅のうへのみならず、すべて学の道にもあることにて、人にとふこそ肝要なれ。まけじ魂をいだして人にとふことをきらふ人は、道にふみたがへおほく、とみにはすゝむことあたはざるものぞかし」（『浜木綿日記』）と述べる。その考えのとおり、有職故実のことは豊岡卿に、そして易学のことは鈴木星海に尋ねる。

聞き書きの魅力

鈴木星海のもとでは、ペリーの浦賀来港（嘉永六年）も近いこのころ、しばしば出沒するようになった異国船の話題になる。久足は「異国船のはなしは俗人のよろこびいひしらふものにて、聞もうるさく、われはさのみこのまざれ」との態度をとるが、星海の見解は記しとどめる。

「近来のさま舶来のものよくひらけて、玩弄のものは皇国人の心にかなふものおほく、甚便利なることのみにて、しかも皇国にて製せるものよりは、価なかくに安きは、交易によるものなるべし。こは皇国のもを彼土にもちわたりては、こよなき徳をうるによれるなるべし。さるからに、かの国人は、としくたくみをめぐらし、皇国人の心にかなふものもちわたるなるべし。されば万国ともに皇国に交易をのぞむが本意にて、おそふにはあらざるべけれど、万国に交易はゆるしがたきゆゑあるによりて、時々異国船のうれへあるなるべし。美人に心かくる人おほくて、災のおこるたぐひなるべく、さのみおそるゝにはたらぬことならん」などかたらひぬ。

商人として、いささかの共感を感じるからこそ書きとどめたのではないだろうか。

かねて不審の易学・占卜に関する質問をすると、星海はいとも易々と回答する。もっとも占いについては、「われはしんずるにあらず、はたすつるにあらず。吉といふはしんじがたけれど、凶といふはすてがたくおもへり。これ毒薬には必しるしあるたぐひなれば也」と久足らしい一家言を持っている。

ところで久足は円山応挙の蔵幅家としても著名で（8）、そのため

か当代の画家とのつながりも持つている。今回も、画家の岸岱と土佐光文のもとを訪れる。

岸岱の父岸駒は、岸派の祖で虎の絵をよくした。岸駒が唐人から虎の頭蓋骨を譲り受け、描画の助けとした挿話は有名で、その頭蓋骨を久足は見せてもらう。また岸岱は鶴を飼っており、一般に知れない鶴の生態を聞き、久足は珍しげに書き記す。

「俗説に『鶴はつがふことなし』といふはいつはりにて、なかくよのつねのとりよりは情ふかく、めどりにせまりて、めどりが足をあやまちせしこともあり。『千年をへざれば頂あかきにいたらず』といへるも、はた俗説にて、丹頂の雛はひなよりして頂あかし。こはおのれ証をえて、よ人のまよひをさませり。こればかりは鼻うごめかすもくるしからじ」などものがたりあり。こはかの耳目のおよぶところを信じて、耳目の外を信ぜざるをなげきし何がしの詞のごとし。心すべきこと也。

土佐光文のもとでは。近松の浄瑠璃「傾城反魂香」の「吃又」のモデルとされる岩佐又兵衛のことを尋ねる。

岩佐又兵衛といふ人の伝さだかならぬをきくに、この家にてもさだかにはわかりがたきよし也。近松門左衛門は先代とする人にて、ふと「画工のことをつゞらん」といひて、「どもの又平」の浄るりはつくりてみせたりといひつたへあるのみ也とぞ。

真偽は定かではないが、疑わしいことも含めて、興味を惹いたこと

がらを記しとどめる聞き書きの魅力が感じられよう。

巷談の楽しさ

著名人との面談とともに、本書に彩りを添えているのは市井のひととのやりとりである。とくに宿の主人や按摩は貴重な情報源であるようで、他の久足紀行でも宿屋で得たゴシップを積極的に採録する。往路の坂下宿における、窮乏ゆえ自殺した旅人の話は印象的であり、草津宿にて切腹した家老の話も聞いての述懐には、商人の分を守ろうとする久足の価値観がよくあらわれる。

かゝる例をおもへば、武士ほどうらやましからぬものはなきを、今の世のくせとして、武士は町人をまね、町人は武士のまねするがならひ也。武士が町人をまねぶは、猶さがたきゆゑもあなるを、町人が武士をまねぶは、家を亡すもとひにて、何の益かあらむ。もしあやまちあらばあやまりて、すみやかにこととのふが町人の徳なるを、町人はひぢをはり、武士はなかく人にあやまるも、あやしきこと也。なさでかなはぬことはなさず、なさでもよきことに心つくすたぐひ、よにおほし。

岸岱が小刀を持つことを「この人は世上のことをよくあきらめがほなるに、小刀をかたはらにおきたるは心得がたし」と批判するのも、同じ理由による。

また古谷石をめぐって岸岱・骨董屋・豊岡卿が関係するが、最終的には植木屋がもっとも詳しく、「この石のこと雅人はしらず、俗人のしれ

るもをかし」とふりかえるように、雅俗になく一連のやりとりを記録する久足の姿勢が、本書の魅力を増しているといえよう。

帰路の水口宿では按摩より、旅行中の神主が鈴鹿山麓の猪鼻にて雷にうたれたと聞く。

「この二日に、すゞか山のあたりいみじき雷にて、棟本宿あたり雲林院村の神主にがしが猪鼻にいこひて、はしなく雷にうたれて死せるが、ともなへるその人の子もおなじく気を失ひしが、こはやうく心つきて、もとにかへれど、ことの外なるさわぎなりきと風説あり。かゝるためしはをりくあなることにて、この宿にも三十年あまりのむかし、なにがしてふ茶屋にて、その家の少女ゆくりなくうたれて死せることあり」とかたる。

この話を聞いて久足は思い出す。久足を馬琴に紹介した殿村安守(篠斎)は、三年前の弘化四年(一八四七)に亡くなっているが、その篠斎が若かりしころ、水口宿にて雨宿りしていると、「いこへる茶屋の背戸に雷おち、はつか一間ばかりのたがひにて少女のうたれたるをみたという。まさにその話を按摩はしていたのである。

件の猪鼻を通りかかると、駕籠かきが落雷の話をする。

かごかくをのこが、「いにし日、この家のこゝに雷おち、かしこにこしうちかけたる雲林院村の神主にがしをたよりとして、けぶりぬきの穴より天上せり。その跡はかしこ」と指さすをみれば、あらたにはつかなる穴あきたり。されば「その人は惣身くろくこけて、きずさへもつきたり」といふは、よべきゝたるにあへり。この家は

おほかたの旅人のかならずいこふ家にもあらぬに、こゝにしもいこひてゆくりなく災にあへるは、のがれがたきすくせのちぎりなりけんかし。

前もって話を聞いていたので、落雷の現場を見て驚きもひとしおであつた。

紀行という器

こうした聞き書き・巷談の魅力は、その未分類性にあるともいえる。面談・会話の折の話題を、興味の赴くままに記しとどめる。そこには当然、意図した話を引出そうとする久足の質問もあろうし、筆録に際して取捨選択する久足の主観も混じつていよう。それでも全体として体系立った話は存在せず、共通するのはただ「久足による見聞」ということのみである。ここからも、紀行という体裁が、いかに許容範囲の広い器であるかわかる(9)。久足はその紀行のなかで、名所古跡を遊覧し、歌を詠み、詩を録し、奇談を盛り込み、芝居の評判を記し、式社を考察し、人物を評判する。古今和漢雅俗の雑然とした話柄も、旅行の折の見聞・述懐ということで成立する。換言すれば、久足が旅し、久足が見聞し、久足が考えるところ、本書全体に、久足という自我がすみずみまで満ちているともいうことができる。そこに自己表出の器として紀行文を選択した久足の意識も垣間見えよう。

注

(1) 小津久足については、拙稿「馬琴と小津桂窓の交流」(『近世文藝』90号、日本近世文学会、H21・7)等を参照されたい。

(2) 菱岡憲司「小津久足「花鳥日記」について・付翻刻」「文献探究」47号、H21・3。

(3) 注(2)に同じ。

(4) 注(2)に同じ。

(5) 小泉祐次「小津久足自筆本『小津氏系図』と『家の昔かたり』について(二)」「鈴屋学会報」5、S63・7。

(6) 橋本政宣編『公家事典』吉川弘文館、H22・3。以下も同書参照。

(7) 注(1)に同じ。

(8) 沖森直三郎「西荘文庫のことども」『馬琴評答集』月報、八木書店、S48・3。

(9) 板坂耀子『江戸の紀行文』(中公新書、H23・1)「はじめに」の「多様な形式、雑多な内容」参照。なお、同書では「第十章 小津久足と旅心」として一章を割き、久足紀行文を近世紀行文学史に位置づける。

凡例

一、三重県立図書館武藤文庫蔵本を底本とした。

一、適宜、句読点・濁点・括弧・改行・字下げを加えた。

一、漢字は通行の字体を用いたが、固有名詞は原文の表記にしたがつたものもある。

一、「ㄣ」「く」は残したが、漢字の後の「リ」「く」等は「々」に統一した。

松陰日記

ことし又、例の都にもものすべきことありて、時は五月廿四日晝ふかく家を出る也。けふは雨ふる。

津にてものなどくひ、久保田宿をすぎ、鷹野尾と鷹野尾新田の間の松原を「中の山」といひ、「みわたし」ともいふに、

みわたしは緑の外に色もなく松陰とほきみちのひとすぢ

けふは大雨ならねば、をりくははれて、雨をふくめるよも山の緑雲のけはひ、えもいはず。かゝるけしきは、から人の詩には賞したるもあれど、やまとうたにはふるく聞えぬも口をしきこと也。

椋本宿にいたり、楠原宿をすぎ、関川をわたるに、去年はいまだとゝのはざりし橋の修理とゝのひて、よき橋かゝれり。関宿をすぎ、筆捨山のほとりにいこふほど、鶯なきたり。

時たがふおのれは春にすてられし筆捨山のうぐひすのこゑ

くれちかく坂下宿にいたり、いつもやどる和泉屋何がしのもとにやどりぬ。なれたるは、たよりよきものにて、けふしもこの家の下男にみちにてあへるが、いそぐこと有てわれよりもさきにいたるべし、といひしかば、「こよひかならず」とことづてせしかば、しづかなる一間をかねてあけおきて、つひしようせり。先、火桶もち出たるを、おもはずひきよせて、後おもへば時たがひたれど、こゝろよくおもふほどの寒也。

されば日くれて後も蚊のこゑは聞へず、「蚊はいかに」ときけば、「盛夏のほど十日ばかり、としぐ蚊帳をもちゆるばかりなり」といふもうらやまし。再昌院法印が六月の半、この宿にやどりし夜、蚊なきよしをつくられたるから歌をみしことあなるが、けふもとふとおもひあ

はされぬ。何事も実のさかひにいたらずしては感なきものにて、發明せることをりくも也。禪家にてことぐしくさとるといふも、おほかたはこのたぐひならんかし。

蚊のこゑを聞ぬあさのこれひとつ家にもまさる旅寝なりけり

蚊にあらぬかじかのこゑはよもすがら耳にさはらぬ旅やかたかなこよひ按摩する盲人が、ちかき頃この宿の京屋なにがしの家にて、旅人が剃刀もて死むとせしを、をりよくみつめてそのゆゑを聞に、「路費つきて、せんかたなきのあまり」といひしかば、「さらば」とて、いさゝか路費をめぐみしかば、いとよろこびて、ことゆゑなかりし。後又も旅人がおなじ家にて、こたびは身にきずつけ死もせずしてありける。ことのもとは同じことにて、こは人しらぬまにしかくせしかば、せんかたなく、はては領主にも聞たことなるわづらひとなれり。「はじめ難をのがれて、後又こと人にて難をのがれざるもあやしきことならずや」とかたりぬ。いかにもことわりもてはかりがたく、あやしきこと也。

こよひ又雨ふる。

廿五日。晝ふかくおきいづ。よべいみじき音せしを、よふけたる川音なめりとゆめごゝちにおもひしは、

おき出る軒端にしらぬ山川のおと聞しは雨にぞありける

けさも猶ふる。鈴鹿山にてしばくほとゝぎす鳴たり。

ほとゝぎすたづきもしらぬ山中にあらねどこゑのしるべがほなる田村明神のみまへをすぐるほど、又ほとゝぎすの鳴に、

ほとゝぎす杉まかくれて見えねども鳴なるこゑはたかくらの野へかくよめるは、このあたりを高座野カウザといふによりて也。

土山宿をすぎ、大野にてもななくひ、水口宿をすぎ、夏見村といふをすぐるほど、このむらは家々に山水をとり、人形などのうごくやうにつくりなして、こゝろぶとうるを、

雨さむき夏見の里は夏めかでものすさまじきこゝろぶとかな

石部宿をすぎ、草津宿ちかくなるほど、川の堤のほとり、いとみわたしよきところありて、いつもめをよろこばしむるあたり也。

はるかなるみかみの山をかぎりにて千町おしなべうゑわたしけりこのあたり近きとしの洪水に堤きれたるよしにて、ところぐさうづたかくつもれり。「こゝは、しほ浜にや」とたづねし旅人があなるよし。こはむげに地理にうとき人の言葉と聞ゆれど、そのさまは、げにも、しほ浜のごとし。

草津宿にいたり柏屋なにがしの家にやどる。この家もたびくやどりて家ぬちみなしれる人也。外孫のあなるに菓子などをあたへつ。われも家に孫なく外孫のみなるが、この家も同じ事にて、外孫をいたくいつくしみて、いつも実の家にはあらず、この家にあなるがよく似たりとおもふ。かく外ならずおもふも私なる人情なり。

さて、この宿はむかし道善寺といふにて、興正ぼさちの布薩ありしよりして、「ぶさつ」といひしを、後に「くさつ」といひあやまりたる也と、その寺の縁起にみえたるよし『閑田耕筆』にかけるはおもしろき説にて、さもあるべし。

日くれたるに、よべにひきかへ蚊いとおほし。よべ一夜やすかりし心おごりにたへがたくおぼゆるも、たよりよきにながれやすきくせなるべし。されど、わがすむさとよりは、おほくおぼゆ。

こよひあるじが、「けふ、みちにて青山下野守殿にあひ給へりしや」とふに、「梅木あたりにてあへり」とこたへたるに、「京をたゝれた

る旧家老のなにがし、大津までの間に、かごのうちにてはらをしもきられたり。『こはしかぐのゆゑよし』など、さまぐに風説はあなれど、まことのことはしるべなし」とかたる。はらきるほどのことならば、いかにせちなるゆゑかありけん、かゝづらはぬことながら、心ぐるしくおぼゆ。

かゝる例をおもへば、武士ほどうらやましからぬものはなきを、今の世のくせとして、武士は町人をまね、町人は武士のまねするがならひ也。武士が町人をまねぶは、猶さがたきゆゑもあるを、町人が武士をまねぶは、家を亡すもとひにて、何の益かあらむ。もしあやまちあらばあやまりて、すみやかにこととのふが町人の徳なるを、町人はひぢをはり、武士はなかく人にあやまるも、あやしきこと也。なさでかなはぬことはなさず、なさでもよきことに心つくすたくひ、よにおほし。こは、はやく『つれぐ草』に、「人ごとに、わが身にうときことをのみぞこのめる」となげきたるは、例のかの法師が口かしこきなりけり。

廿六日。くもる。

あけぬほどにおきて朝いひくふ。旅居の朝飯はこわかか、又はうめざるかのふたつにて、こゝろよくはしをすゝめがたきものになん。

矢橋舟にのるほどは空晴て、よもの見たしもかづくあざやか也。

はるかなるひえの高根のわかみどりひとつおうめの波の色かな大津宿をすぎ、逢坂をこえ、日の岡にいたるほど、郭公鳴たり。

ほとゝぎすうすぐもりする日の岡の青葉がぐれにこゑ聞ゆ也

法場のあたりちかきころ、常念仏の道場めきたるものたてたるも、いかゞ也。はた名号・題目などの石標たちたるは、いづかたにもあな

るが、これらもことわりいかゞなることにて、撰取不捨の本願にはかなへることなるべけれど、罪人までもすくふやうのことになりては、罪人はなか／＼よにおほくなりて、あしきことする人たへざることもり也。かくいはゞ、せばきにしたれど、公の罪人となる人どもは来世も永くあしきにおつ、といふやうのへだてにぞあらまほしけれ。自他平等といひて、よきこともあなれど、人倫のみちをみだることも、はたおほく、これらの弊は浄土宗よりはじまれり。「念仏は亡国の声たるがゆゑに承久の乱出来て王法衰たり」といふも、そのいはれなきにあらず。

日岡につける。粟田御領の松山は、ひるくらく、しぐるきまでしげれる山なりしを、驚かるゝまできりすかし、法師のかしらのごとくなれるは、いかなることにかあらん。金銀のことよりおこれることなるべし。

ひるごろ京にいたり、例やどる三条大橋めき屋何がしの家を旅居とさだむ。ひるすぐるほど小雨ふり、そのゝちいみじき夕立して、後にかみさへなる。こよひ又よべにひきかへ蚊すくなし。

廿七日。くもる。のちにをりくく小雨ふる。

廿八日。くもる。けふもをりくく小雨ふる。

鈴木何がしをとぶらふ。こは土御門殿御内人にて、陰陽のことにはくはしき人なるが、はた漢学の力もおぼろげならねば、陰陽のことにかゝれるすぢの不審をとへば、疑もたちまち氷解せり。

この三月異国船が東海にみえたるにつきて、宸襟不穩よしの御祈、四月の八日より大神宮にかゝれる御下知文に「抛于古法今年曆面有恐

申者」てふことみえしを、人々不審して、ことわりわきがたかりしをとふに、「先は元日、そくてにて火曜にあたり、五月三日、午の日なる、五日、金曜にあたり、七月朔日、そくてにて木曜にあたり、十二月十六日、月そくてにて金曜にあたる」などこと／＼くいみごとのよしこたへらる。

そのことばのついでに、西本願寺門主が「えみしらよはやくぎかへれ神のますみくにとしらで何おそふらん」とこのごろよまれたるよし、かたらる。この門主は、歌の口つきつたなからず、はやく光格天皇昇遊のをりのうたなども評よかりしが、こたびのうたも、かの宗旨のものらが神はよになきものゝやうに我慢をいふにはひきかへて、さすがなりとかんふかし。

さて、異国船のはなしは俗人のよろこびいひしらふものにて、聞もうるさく、われはさのみこのまざれど、そのはなしにうつりて、「近來のさま舶來のものよくひらけて、玩弄のものは皇国人の心になふものおほく、甚便利なることのみにて、しかも皇国にて製せるものよりは、価なか／＼に安きは、交易によるものなるべし。こは皇国のものを彼土にもちわたりては、こよなき徳をうるによれるなるべし。さるからに、かの国人は、とし／＼にたくみをめぐらし、皇国人の心になふものをもちわたるなるべし。されば万国ともに皇国に交易をのぞむが本意にて、おそふにはあらざるべけれど、万国に交易はゆるしがたきゆゑあるによりて、時々異国船のうれへあるなるべし。美人に心かくる人おほくて、災のおこるたぐひなるべく、さのみおそるゝにはたらぬことならん」などかたらひぬ。

さて、今世は、方位のこと流行して、釘をうつをもおそるゝ人あり。それもかれにてよしといへば、これにてはあしといひて、吉凶さだめ

がたく、畢竟はそ業とする人の口腹をたすくがむねとなりて、ぬす人にかてをもたらずたぐひにおつめり。われはしんずるにあらず、はたすつるにあらず。吉といふはしんじがたけれど、凶といふはすてがたくおもへり。これ毒薬には必しるしあるたぐひなれば也。よりにて修理のことはおほかたこの人にたづねてさだむる也。將軍家の御身のトは、土御門殿篋竹をとられて、判断はこの人のかきしるさるゝほどのことなれば、したがひて可なるべし。

「人々の吉凶の生年の日時によるといふ説あるに、生年をまつりて転ずるはいかに」ときけば、「こはおほやけのさだめにて、まことはうきたることなれど、貴人の御縁組は、この君とかの君との外をおきてはとゝのひがたきがあれば、その相性あしきはまつりかへて、その御縁のさはりとならざるやうにすなれば、さる時はなくてかなはざる法也」とのこたへもおもしろし。

それより岸筑前介のもとをとぶらふ。この人、画はさのみ妙手にもあらねど、古老といひ、ものずきある人にて、学力も今のよの画工にはすぎたるほどなれば、ものがたりをかしく、世上のこともわがこゝろひとつにさだめがほなる人也。家づくりもよのつねならず、庭には丹頂の鶴をかひおけり。鳥かふことには妙を得て、この鶴に子をもまするは、としかゝることなりとぞ。

「俗説に『鶴はつがふことなし』といふはいつはりにて、なかゝによのつねのとりよりは情ふかく、めどりにせまりて、めどりが足をあやまちせしこともあり。『千年をへざれば頂あかきにいたらず』といへるも、はた俗説にて、丹頂の雛はひなよりして頂あかし。こはおのれ証をえて、よ人のまよひをさませり。こればかりは鼻うごめかすもくるしからじ」などものがたりあり。こはかの耳目のおよぶところ

を信じて、耳目の外を信ぜざるをなげきし何がしの詞のごとし。心すべきこと也。

「こは父駒が時、から人のおくりし也」とて、虎の頭をいだして見せらる。皆川先生をはじめ、そのころ名ある儒者の記文あり。また床におきたる石は、滝のおつるさましたる白きすぢありて、おもしろき石也。「こは紀伊国古屋谷といふところの産なり」とぞ。この石のこと、われいまだしらざれば、「古屋谷は郡はいづれにや」とゝへど、こはあるじもしらざるよしなり。

さて、さきにもいふごとく、この人は世上のことをよくあきらめがほなるに、小刀をかたはらにおきたるは心得がたし。身は地下官人にて有栖川宮の御内人なれば、武にはちなみなし。これはた、さきにいへる今の世のさまをまぬがれず。心くるしきこと也。

廿九日。くもる。けふもをりく雨ふる。

豊岡大蔵卿殿の御もとをとぶらひ奉る。御宮の三位殿も出たまひて、さまゝの御ものがたりあり。この廿三日には、女御、御着帯にてめでたきよし、かたり給ふ。

御撫物といふものは、いかなるものともはかりがたく、しる人なければ、そをうかゞふに、こは錦を角にちひさきりたるに主上の御いきふきかけ給ふを文庫にいれたるにて、御かたしるのこゝろなるよし。「その文庫は光格天皇の御古をいたゞきたるがあり」とて見せ給ふ。かたちは、よのつねの挟箱のかたちにて、その大きき毫尺にたらず、黒漆にて、封印つくべき金ものありて、ふたに御紋を金にてまきたり。中は金すなこの鳥の子紙にて張りたり。はやくさまゝのおしあての説もきゝしが、千聞も一見にしかず。疑たちまち晴たり。すべて学者

の説はおほかたこのたぐひにて、たしかなる証にあつれば、あたらぬことのみ也。

御父子とも御二代の童をおのゝつとめ給へば、御おくむきの御ことは、人のしらざることもよくあきらめ給へり。

「このほど尾州家の停止、町にはあなるが、御所のうちにはなし」とのたまふに、「去年紀州家のはいかに」とうかがひ奉れば、「関東にちなみあるは、長橋の局ふくみにて、内々鳴ものをとゞむる例なれど、三家三卿たりとも、その家にうまれし人には、そのことなし」とのたまへり。御弟君町尻出羽権介殿も来たまひて、「けふは冷泉家に当座の会あなるに、今よりいづ」との給へり。題は『草庵集』のうちなる「大神宮法楽」の題なりとぞ。かくうけ給はることゞも、ことゞくみやびたることゞもなり。

かへるさ土佐氏をとぶらふ。左近将監ぬしは、としのほど三十あまりなるに、古き図どものことにつきては、とふことをことゞくこたへ、さだかにておぼろげならず。さればとて此人、学力はあらねど、画にて一見見るは、書をよみあきらめたるには、はるかにまさりて、こも千聞一見のたぐひといふべく、筆にしるし口にいふことのわかりがたさも、画にてはわかり安きものなれば、おのづからたどくしからぬにもあるべけれど、家の徳にもよるべし。画の功を「書に同じ」といへる、から人の詞は、げにさること也。

岩佐又兵衛といふ人の伝さだかならぬをきくに、この家にてもさだかにはわかりがたきよし也。近松門左衛門は先代としる人にて、ふと「画工のことをつゞらん」といひて、「どもの又平」の浄るりはつくりてみせたりとのいひつたへあるのみ也とぞ。

六月朔日。雨いみじくふりて、加茂川も水ますほどなり。

祇園御社にまうづ。いつもならば、よべ御興洗、けふはちこの参詣なるを、このほどかの尾州家の停止にて、そのことなし。その停止は三日をかぎりなれば、「御祭礼延引なり」とも「さはあらず」とも、とりゞく風評あり。

けふ縄手どほりの骨董舗に石のあなるが、かの古屋谷なるべくみえしかば、価をとへば、おもひの外安からず。「こは古屋谷石なも」と主のいへるもをかし。ひとたび目にふるれば、その石のかくめにつくも、玩物のくせ、われながらあさましくなん。滝ふたすぢありて、けしうはあらぬさまなれば、もとめたり。

けふ昼飯の膳に、かきもちを二つおきたり。こは都のならひにて、氷室の氷の余風也とか。こはそのまゝにおきたるを、昼すぎて後あぶりて又いだせり。

ふるきよの氷室のなごりかきもちをかきみるからにすゞしかりけり

二日。けふも雨いみじくふる。

北野にまうでんとて、大内の中をとほるに、日御門の前、白川殿の隣にあらたに御殿修覆ありて、めにたたり。法皇御所のあとへ、かりに修覆小屋をたてゝ、いかめしき榜示もたてり。こは今上天皇の実の母君、正親町贈左府公御女、ちか頃、新待賢門院と門院号宣下ありて、その門院のすませ給ふための御殿なり。円山応立など御杉戸の御画、御用かうぶりしよし、さきにきけり。

さて、その法皇御所のあれたるは、さることながら、その臥所によりてはみちに草はえるところもあるを、はじめて大内みる人は、とにかくいふもあ

れど、これらはふかくゆゑあることなるべし。御内儀むきのためでたく花美なることは、はやくうけ給はれることあり。また先帝御凶事のをりなど、御車そのほか諸人のみるかぎりには、はなはだかりそめなりしかど、御陵の穴は人工をきはめて広大なりしよし。この一事をもておしはかるべきことになん。承明門のまにはいつもぬき代を奉れるが見ゆ。関東の御門に、たれかぬさしるをさへべき。あらそひがたきおのづからのことわりおもひはかりて、とにかくいふべきことにはあらず。

かくて北野御社にまうで、かへき七本松あたりの植木屋によりて、ひとくさくさもとめたるに、早咲の夏ぎくあり。名はせいめい香といふよし主がいふに、例のうゑきやの俗名なるべくおもひて、「こは安倍晴明のことか。いかに」となじりとへば、「清明の節よりさくゆゑ也」とこたへたるには口こもりて、つめくはへらるゝもをかし。

三日。けふも雨ふる。かく日々雨ふるはいかなることならんとあやしまるほどのこと也。

けふは安井金比羅・清水観音などにまうづ。

四日。くもる。後天気になりて、いとあつし。このほどの雨にこうじていぶせくおもひしかど、暑ばかりはくるしからざりきとおもふも、わがまゝなる人情也。けふは甲子なれば、天気つゞくべしとよろこぶも有。

川東丸太町の植木屋に行て、うゑきを見る。石菖をもとめつ。この石菖に歌人のめだしためしをきかねど、から人は文房の具にそへてもあそぶめり。書齋におくには、げにもみやびたるものなり。すべて書齋の風流は、から人こそよく趣を得たれ。この石菖、油煙をこのみてすひとるよしいひて、茶人にはもてあつかふもあれど、そはかたくなに夜ばなしのをりにのみもち

ゆれば、風流にあらず。

さて、この家に古屋谷の石あまたあり。「こは石菖をつくるまうけか」とへば、「この石には天然のかな気有て、石菖は金気をいみ、大坂は井の水すべて金気有て、石菖の生たちあしきほどの事なれば、これおのれらがなりはひのたねにて、大坂へ石菖をおくることおほし。かれにあしきは、これによくして、すべて草木は地によりて生たちかはれり。されば、この石には石菖生たちがたし」といふは、そのみちくにてよく理をきはめたるもの也。

「その古屋谷は、紀伊国のいづくぞ」とへば、「田辺にちかきみなべの、おくの山おり」といふ。この石を得て後、人々にもきくにしかど、所しがたかりしに、このうゑ木屋はその谷に行しことありしによりて、よくしれるよし也。これ、はた千聞一見のたぐひなるべし。この石のこと雅人はしらず、俗人のしれるもをかし。わが家にあなるは、盆栽のあしらひになすためにて、さのみよき石はなけれど、「かばかりの石すら、その谷にてはえがたし。盆石などに用ひらるゝは、ましてのこと」といへり。

五日。日よし。けふはことにあつし。

ものへゆくとして、寺町綾小路のあたりをとほるに、このあたりはちかきほど、池魚の災にて、焼野となれる中に、熊谷山法然寺てふ寺の鎮守の天満宮やけ給はずのこれるは、めにたてるに、「火除天満宮」てふ、あたらしきちようちんかけたるは、さるかたにおもはるゝを、ともなへる人が、「こは住僧のわるだくみにて、この御社のふしぎにのこれるより、かゝるちようちんをかけたるにて、その証は、ちようちんのあたらしきにてもしるく、そのたくみしれる人は、住僧をにくむ」よしいふ。かくきておもへば、この一寺やけのこりなば、火除ともいふべけれど、御社のみこのりては、さはいひがたし。このよしおもひはからざるうちは、うち見にふと信じたるが、われながらを

かし。

さては、よの常の人は奇をこのむがおほければ、おもひはかりなくあざむかるゝがおほかるべし。靈験などいふには、かゝるたぐひおほかり。心すべし。僧は人のまよひをさますべきものなるに、まよひをさましては世わたりのたつきをうしなへば、なかゝくに人をまよはす妖僧おほきが今世のならひ也。さきにもいふごとく、この弊おほく浄土宗よりはじまりて、その後ひらけたる宗にことに多し。にくむべきことならずや。

六日。くもる。

豊岡大藏卿殿をとがらひ奉る。さきの日得たる古屋谷の石に御銘をねがふに、「滝のおつるさましたるによりて、『九天』よろしかるべし」とて、たゞちに筆をそめたまふもよろこばし。

ある書に大徳寺・妙心寺の僧は、僧の中にはこの外まぢかく天顔を拝するよしししたるを見しかば、うたがはしくてうかゞひたてまつるに、「いかにもさなり。こは開山のゆゑよしによりて、御簾のほとりまですゝみてまぢかく拝するは、けしからぬためしならずや」とかたへ給ふ。かく承りてつらくおもふに、今は御おもてと御内と両様にわかれて、さるためしあべくもあらねど、昔はその時々御帰依の僧は、みだりにちかづけたまへることなどありしが例となれるなるべし。さればとて、御神事のをり、仏事をいだし、いみたまふことはきことなるを、としぐの御修法、紫宸殿にて行ふこともあり。神仏のさかひはよくわかれて、おのゝけぢめはあなるを、神をたふとむかたにては、御神事のをりのことを常におしわたして仏をこぼち、僧はおもくもちひらるゝ時のことを常におしわたして、わが仏をたふとくせんとすめり。こはふたつとも公論ならずといふべし。一をもて十をおし、わがかたの勝利とせんとするが、おのゝけのならひ也。心すべ

し。

去年の夏、陽明家御虫払拝見あそばされし御ものがたりありて、その品々の目録、ふところがみにしるされたるをみせたまへり。かきうつさまほしきよしをねがひてかり奉る。その品々の中には、世にめづらしきものおほく、「小松殿御消息」などみえたるは、ことにめづらし。こは、平家の人々の筆跡おほき安藝国嚴嶋にすらなきよし、かねてきけるに、いみじきこと也。豫楽院殿は、かゝるすぢに御ものずき、よにたぐひなかりし公なれば、御函書付の品おほきよし。『槐記』にいでたる品々も、その中におほくみえたり。「そのほか茶器なども、よにいみじき御伝来の品おほかれど、そはいまだみず」とのたまへり。

ひるすぎて夕立して、かみなる。宿にかへりて後、夜に入て大雨なり。

七日。日よし。をりくもる。

こよひ御興洗あるよしきけば、祇園町しる人のもとにいたりてみんとす。三条大橋より見るに、四条川原のあたりの灯めざまし。こはさきにいふごとく、六月晦日にあるが例なるを、しかゝることにて風説さまゝなりしが、つひにけふまでのびたる也。こは四日になすことのかたきにあらず。鉾出す町々は「いつものごとくに、けふ祇園会あらまほし」といひよしなれど、「日かざちぢまりては、ぬさ代のがひこよなきこと」とて、のびたりとか。今世のならひ、めづらしからねど、なにことも阿堵物による事、神はいかゞおぼすらん。あさましきことゝも也。

くれすぐるほどよりいたりて、しばしまつほどに、戌の刻にちかく、大きな松火でらして、神興一基いづるさまめざましく、大桃灯といふをもちありくさまも、めざまし。かくてその神興に繩手の辻にて水そゝぐことありといへど、さわぎのらうがはしきにおそれ見ず。ほどなくもとのさまにて

かへるなり。

こよひしもみこしあらふとますらをがあせかきいづるさまもめざまし
さす月もくらきばかりに松の火の光かゞやくよひのさまかな
そのうち祇園社にまうでゝ宿にかへる。亥の刻すぎ雨いみじくふる。

八日。日よし。けふもをりくくもれり。

けふも祇園町にいたり、銚のちこの参詣を見る。卯の舞すぎて参詣あり。こは銚のうへにのるべきちこの、けふしもまうづるにて、俗説には「参詣して位をたまふ也」といふ。そのさま供人あまたにて、先払、金紋の挟箱などつきくねりて朱蓋をさしかけ、行列のさま、あたかも高雲の人のごとし。ちこは肩車にのり、衣服はふり袖につき上下を着し、おもてには白粉をよそほひ、頭には花をかざりてあでやかなり。そのこのみ一様ならず、おもひくく綺羅をかざりてめざまし。もとよりそのちこのかず五人とさだまれるが、おのくべちに参詣して、ひとへにはゆかざる也。巳の刻すぐるほどまでに、のこらず通行はすみたり。

朱のかささしもめにたついでたちは神のめぐみのおほふなりけり

「はやくはのりもののにりて行列せしが、かくなれるは、いにし御趣意のをりよりのこと也」とぞ。「そのをりまでは祇園町繁花にて、両日のねりものなどありしも、こよなくさびしくなれり」と家主がかちがほにかたる。

さて、その御趣意でふことは、「公のことにいたりふかきみめぐみよりいでしことなり」ときけど、そのうち衰へしうちそおほけれ、さかゆるすぢはたえてきかず、そのことわりはかりがたけれと、畢竟は世のさま一転すべき時のいたれるなるべし。かくて祇園社にまうでたるに、拜殿にかざられたる神輿、ちかきころ再興ありしよしにて、きらくしく、いとめざまし。

さて、例年の七日の祭礼は十四日となり、十四日の祭礼は廿一日になれ

るよし也。されば晦日にあるべき御輿洗よべにて、朔日にあるべきちこの参詣はけふとなれるにて、七日づゝの日数、つきくにおくれたる也。かねては祇園会みまほしくおもひしかど、おのれ暑気を甚おそるれば、そのころまではとどまるべくもおもはず、こたびむねとしてまうのぼれることは、はやくこのひしかば、明日はいでたつべくおもひさだめて、宿にかへりてのちその用意す。

未の刻すぐるほどより夕立して、かみいみじくなる。わかきほどは甚おそれしかども、ちかきとしごろは、さばかりおもはざるは、血気おとろへしなるべし。血気さかんなりしほどは、おのづからげきて、あたりうべくもあらぬによりて、なかくにかしこかりけんものが、されど中に二つばかりはいみじきおとしかしこかりしが、はれて後來れる人のはなしに、「二条寺町東と松原大黒町といふあたりとに、かんとけせし」といへり。

「このほど暑たへがたければ、日中はしばしやすむもよし。よをかけて出たつがよかん也」とて、かごにのり、こよひ亥の刻すぐるほどより都を出、石場にてよあけたり。

九日。日よし。

石場より船にのる。船中のあけぼのさまさるかた也。

曙の光をひたすにほのうみ紅かくる波のいろかな

あさすゝの風ころよき船中にあかず心も行なみぢかな

矢橋に船はて、草津宿をすぎて、目川にて朝いひくふ。多川をすぐるほど雨いさゝかふりしが、とみにはれたり。

とくはれんとおもふ心のうらはしもたがはで雨のやみにけるかな

石部宿をすぎ、夏見にてひるいひくひ、水口宿にいたりて、升屋な

にがしのもとにやどれるは未の刻ばかり也。

けふは日中にひるねすべきあらましありしかども、夜あけはてゝのち、うすぐもりして日はてらず、風すゞしかりしかば、たゞちにこゝまできたれる也。われはかごのうちにて眠がちなりしかど、とものをのこは「つかれやすめよ」とねさせつ。

さて、この宿ちかきあたりに山村の天神とまうすがましくて、御霊いやちこなる神にましますよし、かねてよりきゝて、まうでまほしくおもひしかど、いまだはたさゞりに、けふしものこる日足のあなれば、供は宿にのこし、案内がてら、かごをやとひてそれにのり、まうでんとす。

こは宿の北のかたなるが、宿をはなれやゝ行て、名坂村といふをすぎ、その山村にいたるみちの間、五十町といへり。その御社は小だかき所にましくて、石階をのぼりてまうづ。木だちかうくしく、御社もよきほどの御社にて、石の玉垣の両方に石にて童子のさゞげもてるさまをゑりたるがふるくみゆ。御本社御修覆のほどにて、かりのみやしるにまします。

前に神主の家あれど、はかぐしき神主もみえず、よのつねの人也。神の御心をうかゞふには、その神主がみまへにおきたる石をあぐるに、軽重によりてよしあしあきらかにわかるよし。そのことたがひなしとて、ちかきあたりはいふに、おもはず遠きあたりよりも詣る人のおほき也。

山村のやますも人のまうでかへる神のみたまをあふがざらめやもとこしみちをかへるに、水口宿ちかくなりては、くれさへちかくなりぬ。畑中に合歓木の花の今をさかりなる、池中には睡蓮のひまなく咲たるなど、をりからのさまあはれ也。睡蓮などは、さのみ人

の賞せざるものなれど、われは花このむくせあれば、かゝるものまでもめにとまりつ。

田草とる人もみゆるに、

夕月のかげかきよせて賤の手に桂ながらをとる田草かな

この宿のなにがしの寺、「こよひすゞみ」とてにぎはふよしふ。

宿にかへり、よに入てあんまをやとふに、その盲人が「この二日に、すゞか山のあたりいみじき雷にて、椋本宿あたり雲林院村の神主なにがしが猪鼻にいこひて、はしなく雷にうたれて死せるが、ともなへるその人の子もおなじく氣を失ひしが、こはやうく心つきて、もとかへれゞど、ことの外なるさわぎなりきと風説あり。かゝるためしはをりくゝあなることにて、この宿にも三十年あまりのむかし、なにがしてふ茶屋にて、その家の少女ゆくりなくうたれて死せることあり」とかたる。

わがともにてちかきとし身まかりし殿村安守、わかき時、都にいたりしをり、水口宿にて雷雨にあひ、いこへる茶屋の背戸に雷おち、はつか一間ばかりのたがひにて少女のうたれたるをみしよりして、はやくはおそれざりしも、はなはだおそろゝやうになれりとて、かみなるをりは、ことの外おそろゝくせありしが、三十年あまりのむかしといへば、ふとおもひあはするに、その時のことなりけんとなふせつをあはするがごとし。

こよひもよべのごとく宿の人々ねたるほどにと朝飯をあつらへ、亥の刻すぐるほどよりいでたつ。土山はいまだよのほどにて、鈴鹿山にかゝるほど夜あけたり。

すゞか山すゞろにすゞし旅衣たびく袖にかよふあさかせ猪鼻にてもものなどくひ、その家を出てすこしゆきて、かごかくをの

こが、「いにし日、この家のこゝに雷おち、かしこにこしうちかけたる雲林院村の神主なにがしをたよりとして、けぶりぬきの穴より天上せり。その跡はかしこ」と指さすをみれば、あらたにはつかなる穴あきたり。されば「その人は惣身くろくこげて、きずさへもつきたり」といふは、よべきゝたるにあへり。この家はおほかたの旅人のかならずいこふ家にもあらぬに、こゝにしもいこひてゆくりなく災にあへるは、のがれがたきすくせのちぎりなりけんかし。

坂下ちかきあたりにて河鹿をもとめたり。関宿・楠原宿・椋本宿をすぎ、稲荷茶屋にてものなどくふ。久保田宿をすぎ津にいたりて、しる人のもとにやどる。

けふもくもりて涼しかりしかば、みちにてひるねはせず、未の刻すぐるほどにやあらん、こゝにきたり。さきに雨いさゝかふりしかども、とみに晴れたり。

十一日。朝のほど雨いさゝかふりて、ひるすぐるほど、かみすこしなり天気よくなる。

けさはおそく出しかば、家にかへりつきたるは、未の刻ばかりなり。

こたひはむねとかきしるすべきほどのこともなければ、見聞たることどもを筆にまかせたるが一卷となれゝば、かいやりすてんもさすがないて。

嘉永三年の六月

小津久足

（付記）

本稿を成すにあたり、三重県立図書館・日本大学総合学術情報センターには貴重な書籍の閲覧・翻刻許可を賜った。ここに記して、感謝の意を表します。

（ひしおか けんじ・有明工業高等専門学校）